

思考力・表現力を育む授業づくり

～新聞・ICTの活用を通して～

関川村立関川小学校

1 NIE実践のねらい

(1) 研究主題設定の理由

子どもたちの純朴な素直さからか、課題を熱心に解き明かそうと追求する姿勢は素晴らしい。しかし、既習事項を生かして解決方法を考えたり視点を変えて物事を考えたりしながら、いろいろな考えをもつ人とディスカッションし考えを練り上げていく姿勢には、やや弱さが見られる。自分が考えたことを「書く」「話す」などの表現力として、さらに高めていかなければならない。

また、年10回行っているWeb配信集計システムの実施状況からも、語彙力不足や言語事項の定着率の低さが顕著であり、問題文や設問の意図を読み取る力が不十分であることも挙げられる。また、問題文に書かれていることと関連付けて考える力・比較する力などの思考力を育てていく必要がある。

(2) 目指す子どもの姿

当校の実態から、子どもたちに身に付けさせたい思考力・表現力を次のようにとらえた。

思考力 :理由や根拠をはっきりさせて、自分の考えをもつ力。意見交流しながら、自分の考えをよりよくしていく力。

表現力 :自分の思いや考えを文章で表現できる力。(書く・話す)新聞や資料等の良さを自分の表現に取り入れる力。

そして、学校全体として目指す子どもの姿を次のように設定した。

- 自分の考えの拠り所を明確にし、自分の言葉で表現できる子ども
- 友達と関わりながら、自分の考えをよりよくできる子ども

この姿を受け、低、中、高学年部でより具体的な姿を設定した。子どもたちが主体的に学習課題に取り組み、新聞教材から得た情報と関連付けながら解釈や分析を行い、根拠や理由を明確にして自分の言葉で説明したり書いたりできる子どもを目指した。加えて、新聞記事や写真、映像などを含む資料との関わりから生まれる気付きや感想を大事にし、互いの考えを伝え合い、自分の考えやみんなの考えを発展させるような関わりを意識した話し合い活動ができる姿を期待した。

(3) 研究内容

ICT機器の活用は、当校の特色の一つでもあるため、日常的に活用していくこととする。また、授業の中で思考を働かせて表現するためには、「話す・聞く」「話し合う」スキルの充実や「書く」活動の保証、学習集団として互いに認め合う雰囲気が必要である。以上のことは日常的に取り組む内容とし、今年度は、次の2点について授業実践を行うこととした。

① 思考を促す教材としての新聞活用、および教材提示の仕方

本時のねらいを達成するために、新聞をどのように活用すれば思考を促すことにつながるのか、また、電子黒板や書画カメラなどの ICT 機器を有効に使い、本時の課題や新聞等の教材提示の仕方に工夫はできないか、という視点で研究を進めた。新聞はそれだけでは教材になりにくいいため、児童に思考させるためにどのように教材化するか、また、どのように活用するかを探った。

② 人と関わりながら、思考力・表現力を育む言語活動

友達と関わる明確な目的をもち、どのような言語活動をさせると、思考が広がり深まったりするのか、「活動あって学びなし」にならないために、その手立てについて研究を進めた。

当校の子どもたちは、自分の考えを言葉で伝えたり友達の意見につなげて考えを述べたりすることが苦手な傾向がある。そのため、友達の考えをよく理解しようと聞き、自分の考えとつなげて発表したくなるような学び合いのスキルを習得させるための取組を全学年で普段から実施した。

2 実践の経過～ICT 機器の活用を中心に～

当校の特色の一つである ICT 機器と新聞記事等を、授業のどの場面でどのようにすれば、児童の思考力・表現力を育むことができるのかということを授業づくりのベースにし、実践を積み重ねてきた。その結果、新聞を使った授業の中で、次のような ICT 活用場面が見られた。

○ 電子黒板に大きく映し出す・書画カメラの活用含む

- ・新聞記事を書画カメラでズームをしながら、注目させる。
- ・既習のカタカナやカタカナを使った文を読む練習。自作の文をみんなで読む。
- ・新聞記事の写真を、自分が作った文の発表の時に、写真のどの部分からそう感じたかを指し示す。
- ・写真の様子から、以前交流した時のことを想起させる。
- ・2枚の新聞記事の写真を比較。
- ・新聞のグラフを引用。
- ・穴埋めにした新聞の見出しを提示し、そこに当てはまる言葉を考えさせ興味・関心をもたせる。また、新聞記事の中心を捉えさせる。

○ 使い分け・軽重

- ・デジタル教科書や前時の学習内容は電子黒板を、本時の学習は黒板を使用。

○ デジタル教科書の活用

- ・ワークシートや問題をそのまま活用。

○ パワーポイントの活用

- ・既習事項の想起、確認。
- ・パワーポイントを使用しながら、授業を進めていく。

○ タブレットの活用

- ・タブレットに配信された教材文の良さを書き込む。
- ・自分の意見をタブレット上に書き込み、意見交流後、書き直す。

授業実践では、導入場面での新聞活用が多く見られた。低学年では、児童が親しみやすく発達段階に合った写真や記事は、児童の意欲や主体的な姿勢の持続につながった。高学年では、学習した内容と新聞記事に関連付け、自分の事として思考する学習材になり得ることも分かった。そして、単元を通して新聞に親しませ、活用を継続することで思考力や表現力の育成につながることも明らかになった。

3 本年度実践の概要

(1) 各階に NIE コーナーを設置

より子どもたちの身近に新聞はあった方がよいという職員の声を受け、2 年次は各階に設置した。注目してほしい新聞記事を基にしたクイズを掲示したり、各学年の取組の様子を掲示したりする場として活用した。学習内容と直結している時は、その掲示をそのまま授業で活用できる利点があった。



(2) NIE タイム

2 年次は、全校一斉の NIE タイムを毎週木曜日の朝学習に実施した。今年度は、記事や写真を貼ったり感想を書いたりしやすい A4 版の NIE ノートに取組の足跡を残した。

2 学年の見出し付けバトルや、3 学年の話の中心に気をつけて、はじめ、中、終わりの三段落構成で書く活動は、今年度 4 月からの継続した取組だったため、児童の読解力や書く力が大きく伸びた。学習の大事な基礎的な部分を、この NIE タイムの取組が担っていると言える。



1 年生最初の NIE タイムは、新聞を電子黒板に投影し「新聞って楽しそう！」「こんなことも載っているの！」と、ワクワクの出会いだった。



(3) 委員会とのタイアップ

放送委員会は、毎週火曜日の昼の放送で「とっておきの記事紹介」、毎週金曜日に「ことわざクイズ」を行った。子ども新聞「ふむふむ」や朝日子ども新聞、毎日子ども新聞など、新聞の出所を明らかにした。すると、子どもたちからは「今朝、家でふむふふを読んできたから、分かるよ。」という声が聞こえてくるようになった。図書委員会は、毎朝各学級に新聞を配達し、できるだけ多くの児童が新聞に親しめる環境を整えた。



	取 組 内 容	成 果
低 学 年	○新聞の種類や新聞の扱い方などの初期指導。 ○「カタカナ」や「平仮名」,「季節の言葉」探し。 ➡ 文作りや俳句作りに発展させる。 ○子ども新聞の迷路や間違い探しなどのクイズ。 ○新聞を使って楽しく変身。 ○気に入った写真に題名付け。 ○新聞記事を読んで見出し付け。 (2人組での対抗戦) 	◎新聞に対する関心が高まり,自分たちにも楽しめるものがあることが分かった。 ◎写真だけに向いていた興味が,記事の中身を読もうとする意欲付けになった。 ◎継続して見出し付けに取り組むことで読解力が高まり,短時間で大事な言葉を見付け,見出しづくりができるようになった。 
中 学 年	○新聞記事を読んでから「新聞穴埋めクイズ」にチャレンジ。(記事をスキャンして作成) ○新聞しりとり。 ○新聞スクラップ。 ○新聞記事からクイズ作り。 ➡ 難易度を変えることで,集中して記事の内容を読み深めていくことができる。 ○新聞記事から分かったことを話の中心に気をつけて三段落構成で書く活動	◎タイムリーな記事を選択することで,暮らしの行事や出来事への関心,言葉への関心が高まった。 ◎分からない言葉は辞書で調べるなどし,語彙力が増えた。 ◎三段落構成で書く活動を継続したことで,新聞記事の事実と感想の区別をし,話の中心がぶれない文章を書く力が高まった。 
高 学 年	○班対抗!漢語と和語探し ○記事を基にしたポップ新聞作り ○日直の「今日のニュース」発表。 ○写真を見て,詩で表現。 ○新聞スクラップ。 ○おすすめ記事発表。 ○同じ記事での意見交換。 	◎選択した記事の要約文や感想を,スムーズに書くことができた。 ◎興味をもった記事が見つかるまで,いろいろな新聞を読もうとする姿が見られた。 ◎同じ記事を介して,様々な見方や考え方の交流ができ世界が広がった。

(4) 新聞への積極的な投書

全校児童が,夏休みの課題として新聞に関する各種コンクールに応募した。新聞を媒体として,家族と語り合いながら取り組んだ様子が,とてもよく伝わってくる作品ばかりだった。また,学習の成果として「ジュニア文芸」に投書した作品が,新聞に掲載されることで,子どもたちのよい励みになった。

新聞記事感想文コンクール 大賞 6年

新聞スクラップコンテスト 優秀賞 1年 入選 4年(2名) 5年 1名

実践 1 第 1 学年 国語科 「ともだちに、インタビュー」

【本单元における新聞や ICT の活用】

- ① 電子黒板に、インタビューをしている写真を拡大提示し、興味や関心、学習の見通しをもたせる。
- ② 新聞のインタビュー記事から、相手の話を詳しく聞き出すための言葉「きくぞうワード（どうして、どんな、どうやって等）」を隠し、適語を考えさせる。
- ③ 電子黒板上にデジタル教科書を投影し、動画を見て友達へのインタビューの仕方を学ぶ。
- ④ 新聞のインタビュー記事から、「きくぞうワード」を探し、その後、実際にその言葉を使ってインタビューの練習をする。
- ⑤ 電子黒板を用いて、新聞の質問記事で「きくぞうワード」を使っている箇所に注目させながら、既習事項の復習をする。（本時）

(1) 本時のねらい

相手の話を詳しく聞き出すための言葉「きくぞうワード」を使って尋ね、大事なことを落とさずに興味をもって聞くことができる。

(2) 指導の構想

① 思考を促す教材としての新聞活用、および教材提示の仕方

新聞記事からより詳しくインタビューするための言葉「どうして」「どんな」「どうやって」を取り上げる

デジタル教科書の動画では、「いつ」「どこで」「だれと」の言葉を使って聞いている。しかし、新聞記事からより詳しくインタビューするための言葉「どうして」「どんな」「どうやって」を取り上げる。それらの言葉を「きくぞうワード」と名付け、それを使って聞いてみたいという意欲付けをする。本時で使用する新聞記事は、「きくぞうワード」に注目させるため、発達段階に合わせて再構成した。

本時では隣にいる友達にインタビューする前に、この再構成した新聞記事を使い「きくぞうワード」を使ってインタビューする練習を行う。

② 人と関わりながら、思考力・表現力を育む言語活動

新聞記者になりきる場面を設定する

本時は、まず隣にいる友だちについてインタビューを通して知ることに関わりを深めていく。新聞記者になりきってインタビューすることで、より深く質問を聞き出そうという意欲を持たせる。インタビューでは、聞き終えた後にメモをとらせる。大事なことを落とさないようメモし、聞き落としたことは、もう一度聞き直してもよいことにする。また、インタビュー後、上手にできていたペアが実際にインタビューを行う。その様子を見て友だちの良いところに気付き、自分も取り入れられるようにする。

(3) 授業の実際

再構成した新聞記事の「きくぞうワード」を隠しておき、返事の文から使用できるきくぞうワードは何か、注目させた。(電子黒板に投影) 既習事項の「きくぞうワード」はどの子も覚えており、インタビューの時に使えばよいことを理解できていた。しかし、「きくぞうワードを自分で選んで聞けるように指導してきたが、「どうして、〇〇を始めたのですか?」と聞くとところを「どうしてですか?」とだけ聞いている子もいた。



また、本物のマイクや腕章を使ったことで、新聞記者になりきって意欲的にインタビューすることができた。テニスを習っている相手とは、「どんな練習をしているのですか?」「グラウンドを走ったりボールを打ったりしています。」という会話や、めんこを作ることが楽しいと話している相手とは、「どうやって作るのですか?」「厚



紙を重ねて作りました。」というように、尋ねたいことを自分で考え、きくぞうワードを使ってインタビューする姿がたくさん見られた。

お手本となるペアに実演させることで、質問内容に応じて「きくぞうワード」を選んで質問できていたことや、大きな声でインタビューできたことなど、友達ペアの良さに気付いていた。

実践 2 第 6 学年 国語科 「関川村の人口減少を防ぐ意見文を書こう」

【本单元における新聞や ICT の活用】

- ① 新潟県や関川村の人口減少に関わる新聞記事を用いて、実態を把握する。
- ② 他市町村の取組をインターネットで調べる。
- ③ 新聞記事の投稿作文から、意見文の書き方を調べる。
- ④ タブレットに反駁を書き、友達と交流活動を行う。

(1) 本時のねらい

新聞記事を比較して読むことで、予想される反対に対する反論を書くと、説得力が増すことを理解し、自分の構成メモに予想される反対意見の反論を書くことができる。

(2) 指導の構想

① 思考を促す教材としての新聞活用、および教材提示の仕方

投稿記事の内容に対して、自ら反対意見を出すことで、反駁の効果に気付かせる。

本時では、新聞掲載された世代が同じ子どもの意見文を教材とする。この意見文は、「小学校合併に賛成」という立場で理由が 2 つ書かれており、さらに説得力を増すために、予想される反対意見に対する反論(反駁)が書かれている。導入では、

反駁部分を隠した意見文を提示し、小学校合併に反対の意見をいくつか出させる。そこで、自分たちがこれから書く意見文にも反対意見が出されることを話し、反対意見には反論しなければならないという課題意識をもたせる。

② 人と関わりながら、思考力・表現力を育む言語活動

自分で書いた反駁を友達と交流し合ったり、アドバイスし合ったりする。

自分たちで出した反対意見に対して反論することで、反駁を書くと言説力が増すことを実感させる。その後、前時に書いた自分の意見文の構成メモをもとに、予想される反対意見を書き、それに対する反論を書く。書いた児童から、友達と交流したり、うまく書けない子はアドバイスをもらったりする。交流活動をすることで、全員が自分なりの反駁を書けるようにする。

(3) 授業の実際

反駁のよさを実感させるために、投稿記事の意見に対する反対意見の解決策を考えさせた。小学校合併に伴い、通学が遠くなること、初めて出会う人と仲良くなれるのかという問題に対し、子どもたちは「通学バスを出せばよい」「ミニ交流会や祭りを開いて仲良くなる機会を増やせばよい」という解決策を考えることができた。

その後、役場の方からの意見ももとにして、個々のタブレット上に自分の提案に対する反対意見とそれに対する解決策を考えた。「農家レストランを作れば、村が活気付く。」と考えた子どもは、予算や建物を建てる場所が無いことの解決策を募金活動や村から支出、出店する場所は、大きな通り沿いの人目のつくところがよいなど

の解決策を考えることができた。

また、タブレット上に書き終えた子どもは、解決策が思い付かない友達にアドバイスをしたり、自分の解決策に感想を述べてもらったりした。そうすることで、自分の意見文に自信をもって提案できたり、視野を広げたりすることができる有意義な交流の時間であった。



5 成果

2年間の研究の成果を以下に述べる。

(1) ねらいを明確にした計画的な新聞活用

新聞活用を通して、単元で育てたい力を付けるための手立てを複数用意し、指導計画に配置した。それらの手立てを実施することで、思考力や表現力が身に付いた。また、新聞記事と自分たちの活動を関連させ、体験や活動を繰り返しながらその記事と対峙することで、自分たちの活動の意味づけをすることができた。

(2) 比較を通して生まれる思考と表現

教材文と新聞記事や見出しなどを比較させ、共通点や相違点、良さなどの視点を与えて考えさせることで、子どもの思考を促し自分の考えを広げたり深めたりすることができた。友達と意見を交流することで多様な考えに触れ、自分の考えに自信をもつことができた。また、新たな気づきを広げたり深めたりすることもできた。

(3) 実生活との関連から生まれる思考と表現

新聞記事やグラフ、様々なデータを活用した授業は、子どもと社会を結び付け、自分の事として問題を捉え、考える姿勢が育まれた。実生活に生かせる学習内容の気づきや理解を促し、社会の実態を考察しながら新聞記事の表現を自分の意見文に生かすなど表現力の高まりも見られた。

全校児童のアンケートからは、

★読解力が向上したと実感した子ども：79. 8%

★文章表現力が向上したと実感した子ども：83. 2%

「NIE タイムの時、新聞に書いてある内容が分かり、文章を書く量がだんだん増えてきました。今まで習った漢字も使い、自分でも書く力がついたと思います。」

(5 年男子)

「テレビでは分からないことが、新聞には詳しく書いてあります。家族とそのことを話したり、細かい知識も増えてたりしたのでよかったです。」

(6 年男子)

と、多くの子どもたちが学校だけでなく家庭でも新聞に親しみ、NIE の授業を通して自分の学びの成長を感じることができたことは、大変喜ばしいことである。

また、職員も「NIE タイムの継続した取組は、初発の文章を読み解く力を付けるのに、とてもよい取組だった。」「写真、文章、グラフなど、様々なテキストを関連付けて考察する力が、伸びた。」など、NIE の効果を高く評価している。

6 課題

新聞や ICT は、授業のねらいを達成する手段の一つである。それに合致した記事と出会うためには、広く新聞に目を通す等、教師の継続した取組が必要である。日々の記事をどう教材化し授業の中で活用していくか、今後も研究を続けていきたい。更に、子どもたちが自発的に新聞を手に取り、記事を読んで考える習慣を更に身に付けていくためには、新聞を読む必要感や新聞から情報収集する必要性を感じる単元構成を考える必要がある。